

共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」

2020年度第2回研究会

日時：2021年1月10日（日曜日）14時00から17時00分

Zoomによるオンライン開催

当日のプログラム

1. 長峰博之（AA研共同研究員，小山高専）「後期ジョチ朝史料は何を参照し、いかにジョチ朝再編を認識したのか？」
2. 総合討論

参加人数：10名

報告

本研究会では、近代以前の中央ユーラシアにおける歴史叙述の系譜について考察し、それが後代の歴史認識・解釈に与えた影響を議論するものであった。近年広域にまたがる史料の詳細な分析を行っている長峰氏に報告をお願いした。以下、報告の概要を示す。

## 後期ジョチ朝史料は何を参照し、 いかにジョチ朝再編を認識したのか？

長峰博之（小山高専・専任講師）

ジョチ朝（ジョチ・ウルス）からその再編後に成立した諸ハン国（後期ジョチ朝諸政権）への連続性・不連続性については多くの議論がある。本報告では、後期ジョチ朝諸政権で著された諸史料における歴史叙述、歴史認識のあり方という視点からこの問題について検討した。前時代までの歴史をいかに自分たちの歴史に接続しているかという点を検討するため、「普遍史」の叙述スタイルをもつ史料を分析対象とした。とりあげた史料は以下である。

●アブル・ハイル朝／シャイバーン朝史料、ジャーン朝史料：無名氏『選史・勝利の書』、無名氏『シャイバーニー・ナーマ』、アッラー・ムラード・アナバイ・オグル（？）『オグズ、アラン・ゴアそしてシャイバーニーの書』、アブドゥッラー b. ムハンマド b. アリー・ナスルッラーヒー『ズブダト・アル・アーサール』、ハーフィズ・タニーシュ『王の榮譽の書』、マフムード b. アミール・ワリー『神秘の海』

●ヒヴァ・ハン国（アラブシャー朝）史料：ウテミシュ・ハーギー『チンギズ・ナーマ』、アブル・ガズィー『テュルク系譜』

●カシモフ・ハン国およびヴォルガ・ウラル地方史料：カーディル・アリー・ベグの史書（『集

史』)、無名氏『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』

●クリミア・ハン国史料:ムハンマド・リザー『七惑星』、フッレミ・チェレビーの史書(『簡史』)、アブデュルガッファール『諸情報の要諦』

諸史料の叙述のあり方からは、それぞれの王統(ハン国)の歴史を、ときに系譜を増補しながら、前時代の歴史に接続し、その支配の正統性を主張しようとしたことが看取される。その際、先行研究でも指摘されているように、前時代までの歴史を叙述するうえで広く参照されたのはラシドゥッディーン『集史』であった。しかし同時に、ティムール朝史料やオスマン朝史料からの影響も窺われるのであり、とくにヤズディー『勝利の書』の影響は大きかったようである。『集史』や『勝利の書』などを参照した後期ジョチ朝史料が、次の世代に参照され、補足される史料になっていった点も興味深い。また、これらの諸史料においては、ジョチ朝再編後の諸ハン国はトカ・テムル家、シバン家内の諸王統の政権として認識され、そのなかで諸王統の「名祖」観が形成されていったことも窺われる。これらの諸史料の叙述のさらなる分析、モグール史料、モンゴル年代記、オスマン朝史料などとの比較検討は今後の課題としたい。

総合討論では、分類の妥当性、君主たちの血統(とその継承)の意義、写本作成の意味などについてとくに議論を行った。叙述される内容が近代にいたるまでどのように継承されるのか/されないのかについて、その歴史認識の変化とともに考察する必要があることが改めて示されたと考えられる。伝播と改変という歴史叙述のいわば縦軸と横軸とを統合して考察しようとする本研究課題の手法にとっても、東西の多くの史料を広域的に分析する長峰報告の成果から多くの示唆を得た。

引き続きメンバー限定で行った打ち合わせでは、成果公開、とくに歴史叙述データベースについての具体的な作業・進め方について討議を行った。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.